

巻 頭 言

東京女子医科大学眼科

ホリ サダオ
堀 貞夫

1988年に私が東京女子医科大学に奉職して24年が経とうとしている。その前年に非常勤講師として1年間お世話になったので、それを含めると25年間、1/4世紀を東京女子医科大学で過ごしたことになる。最初は糖尿病センター眼科で、あとの14年間は眼科学教室で過ごした。2012年3月に定年退職するにあたり、締めくくりの何かをするべきか、するとなれば何をするか、1年以上考えめぐっていた。世間ではよく「〇〇教授退官記念誌」などとして、立派な表紙の分厚い本を出版する。お世話になった先生や親しい先生方の記念誌だと、思い出に浸りながら、あるいは当時気付かなかった新たなことを文面から知らされて、貴重な授かりものとして蔵書することが多い。しかし、自分にあまり深いかわりのなかった先生方から頂くと、残念ながらしっかりと読む気にはなれないのが偽りないところである。医局の先生方および自分の過去の業績を編纂することは、医局のスタッフの先生方に多大な負担をかける割には新たなものが生まれず、ただの自己満足に終わってしまうような気がした。退任に関わる行事としては、ただお別れのパーティーだけでもやっていただこうかと思っていた。

そんな折に、東京女子医科大学雑誌の編集委員長から、「最近退任する先生方のうち、何人かが『〇〇教授退任記念特別号』という形で臨時増刊号を発行しているが、先生はどうですか？」と提案された。医局長に調べてもらった結果、かなり自分たちの企画で編纂し、我儘ができるように優遇されているとのことであった。退職の日付から残りの期間が10ヵ月、雑誌が発行される予定の期日から8ヵ月、原著や症例報告などの査読を要する原稿の投稿締め切りまでの期日から4～5ヵ月の期間しかないことが逆算されて判った。これでは投稿するのに医局員の皆さんに相当な負担がかかると思い、「できる人だけでよいから」と断りを入れてお願いしようと考え、スタッフ会議で提案した。スタッフの皆さんの意見は「全医局員の義務」にするということでもとまり、その代わりに若い先生方の論文に関しては、スタッフを含めた指導医の先生が全面的に面倒をみるという方針になった。

スタッフや指導医にあたる先生方には原則として総説を含めて原著を、若い先生方には症例報告を書いてもらうことにした。「そんな無理なことを」と言ってほやいた方もいるはずであるが、私の耳には届かなかった。この増刊号の原著論文は学位審査や、眼科専門医制度の規定する受験資格を取るための論文として扱われることも判って、それらに当てはまる人たちには大きな目標になった。しかし、非常勤講師や嘱託医の先生方には、日常診療の忙しい中で新たな論文の作成は無理な場合があると考え、過去に発表した論文の中で自分の代表作を選んでもらい、それを転載してもらうことにした。ただ転載するだけでは代表作としての意味が伝わらないので、その論文の学問的意味、その論文に関わるその後の研究の発展、書くにあたっての苦労話、現在の眼科医である自分にとっての意義などを、随筆や印象記のような形で解説してもらうことにした。

8月末を原著の締切日と定められ、ほとんどの先生が切迫感を持って題材探しから始めた。しかし、暑い季節のせいもあってか、なかなか私のもとに原稿が届けられない。私はすべての原稿を投稿前に見せてもらう方針としていたので、なかなか原稿が上がってこない状況に焦燥を感じていた。ギリギリまで後送りするのが原稿を書く場合の倣いで、案の定8月31日の2～3日前に、「締め切りが近づきましたのでよろしく」といって12～13編の原稿が上がってきた。いくらなんでもこんなに切羽詰って一度に持ってくることはないだろうと

思ったが、一人ひとりしてみれば締切日よりも前に出したことになるので、「何が悪かろう」ということだと思ひ直し、頑張ってみることにした。しかし、全部で10編余では寂しい記念誌になってしまうと思ひ、学会室に問い合わせたところ9月末まで締め切りを延期できるとのことだった。この締め切り延期がすでに知れ渡っていたようで、のんびり構えていた人はさらにのんびりし、最後の人が投稿したのは10月の半ばを過ぎた時点であった。しかし、学会室の厚意が実を結び、総説を含めた原著が25編、症例報告が21編、印象記を添付した転載論文が7編で、総数は53編となる、立派な特別号を編纂することになった。全ての投稿原稿には新たに書かれた文章が掲載され、投稿した医局員の先生方は少なからず満足を感じてくれていると思う。

この特別号は東京女子医科大学から発信される雑誌の一部であり、学術雑誌としての流通性は他の学会誌に比べるとやや劣るかもしれないが、ピカピカ光る内容をもつ論文が多数含まれている。退任記念号として発刊された東京女子医科大学雑誌に、多くの先生方の熱意と私にたいする厚意が込められていることに満足し、深甚な感謝の意を表したい。

東京女子医科大学雑誌編集室のご厚意に深謝致します。

2011年12月